

ザ・ペンズ サロン

筆者の豊富な機微に通じた人生経験から、夢と希望の光を希求する、次世代へのメッセージ!

ジョークサロン会員／リレーエッセイ⑬

北海道鉄道の旅今昔(昭和と平成)物語 その2

青函トンネルを寝台特急「北斗星」で 駆け抜けた平成の「北海道鉄道の旅」

1988(昭和63)年3月13日、本州と北海道を結ぶ「青函トンネル」が開通。これにより上野と札幌を結ぶ豪華寝台特急「北斗星」が運行を開始した。

1990(平成2)年の夏休みに、家内が小・中学校時代を過ごした北海道・芦別市を家族で訪ねるため、18年ぶりの北海道再訪を決意した。

「北斗星」の寝台券を取ろうとして、申込みできる1ヶ月前の朝一番で横浜駅「みどりの窓口」へオファーするも瞬時に売り切れ、何度も臍をかんだ。知人の旅行業者経由でやっと「北斗星5号」の個室B寝台が確保できた。

個室の中は上下二段ベッド。5才の長男と私、2才の次男と家内が一緒に横になる。19時3分上野発。生憎の大雨で遅れ気味なるも、列車は路北の大地を目指す。車内電話から家内の実家へ、こちら「北斗星5号」と電話を入れる。青森から津軽線を経て海峡線へ向かう。青函トンネルの入口で車内放送が入る。「ご案内致します。列車はただいまから青函トンネルへ入ります。」祝砲のような電気機関車の汽笛が被さる。

連絡船への乗換無しで津軽海峡をトンネルで通過する。映画「海峡」の健さんの

ように、ここから先はまさにロマンの世界だ。「北斗星5号」は室蘭本線千歳線経由で遅れを取り戻そうと疾走するが、

予定時刻の10時57分より2時間以上遅れて終着の札幌着。払い戻された特急券代で早速札幌ラーメンを食べる。

札幌からは「特急「ライラック」で滝川まで電車の旅。滝川からの根室本線普通列車池田行は207キロを5時間かけて走るロングライナーながら、ディーゼルカー1両だけ。待望の芦別に17時14分着。家内が懐かしそうに眺める駅舎を後に、予約した市の温浴施設で北海道最初の夜。

翌日は家内がかつてお世話になった芦別在住のご夫妻の車で市内を案内して頂く。約束の時刻に遅れたご夫妻は「トウモロコシをふかして遅くなった。」と謝られたが、そのトウモロコシの美味しかったこと!

その後市内を見渡せる高台や芦別鉱山炭坑施設、家内が住んでいた社宅つげが効いたという売店等を案内頂いた後、家内が家族で通った駅近の食堂「赤シャツ」でお昼をこ馳走になり芦別駅へ戻った。

お見送り下さったご夫妻に手を振り、

芦別から北海道の「臍」と言われる富良野まで再び根室本線ディーゼルカーの旅。芦別はその後「ふるさと納税」でご縁ができ、毎年感謝状とともにお米が届く。富良野では小綺麗なペンションに泊まり、翌日はラベンダー畑や気球広場を楽しんだ。駅構内に停まっていた「フラノエクスプレス」を眺めながら、急行「狩勝」で更に根室本線の東を目指す。

乗車前のホームで運転士さんに「「狩勝」に使われている古参のキハ58系の北海道版キハ56系が今も元気で活躍している嬉しい。」と言ったら(今なら許されないことだが)鉄道好きの長男を抱いている私を、運転席へ招き入れてくれ、ずっと「電車でゴー」の景色を楽しんだ。もともとも昼食後で長男はウツラウツラ。「殆ど寝てたね。」と運転士さん。当時途中に信号所はあるも、日本で最も駅間距離の長かった落合新得間28.1キロ(東京横浜間に匹敵)を通過し新得着。

一度目の「北海道鉄道の旅」の時には無かった石勝線を経由する、特急「おおぞら」で千歳を目指す。帰りは千歳空港から羽田空港へのフライトであつという間に帰京し、3泊4日二度目の「北海道鉄道の旅」は無事終わったのだつた。

二度目の「北海道鉄道の旅」以前の1983(昭和58)年4004キロあつた北海道の旧国鉄路線は2017(平成29)年にはJR北海道として2552キロまで減っている。同社の鉄道事業収益は極めて厳しい状況にある。関連事業や経営安定基金運用収益でカバーしているものの、北の大国に対峙し、食料自給の観点

からも極めて重要な北海道の、都市間輸送と地域の公共交通インフラを担う同社には、今後も生き生きと存続して頂きたいものである。

結びに既存の提言や他地域での事例を参考に、打ち手を明記したい。

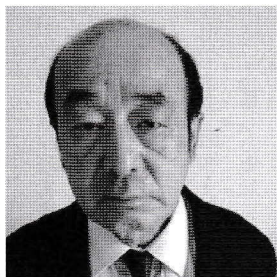
①鉄道事業への「上下分離方式の導入」。線路や駅等の設備(Ⅱ下)は道や沿線自治体(場合によっては北海道開発局もあり)に保有して貰い、同社は列車の運行(Ⅱ上)に特化し負担を減らすというものの。

②「地域フリーパス(仮称)」の導入。鉄道と民間バスの並走区間等では、早く来た方に乗れる等、同じ交通事業を営む同士で補完しあうというものである。

この他の有効な打ち手も加え、元氣を取り戻したJR北海道を駆使した三度目の「北海道鉄道の旅」が実現できる日を待ち望んでいる。

著者プロフィール

おお と ば ゆう た ろう
大鳥羽 裕太郎



1951年大阪府枚方市生。
1975年一橋大学社会学部卒、三菱重工業(株)入社、横浜製作所人事、経理、営業管理を担当。
1992~2000年ブラジルの関連会社で管理業務全般を担当。
趣味は小学生からの「鉄道全般」、高校生からの「中・長距離走(今はジョギング)」、定年後始めた「俳句」。亡父も会員だったジョークサロンへの参加と笑品「(幸裕(=交友)録)(頼珍漢な会話)」執筆を楽しんでいる。